

平成十八年九月三十日（土）

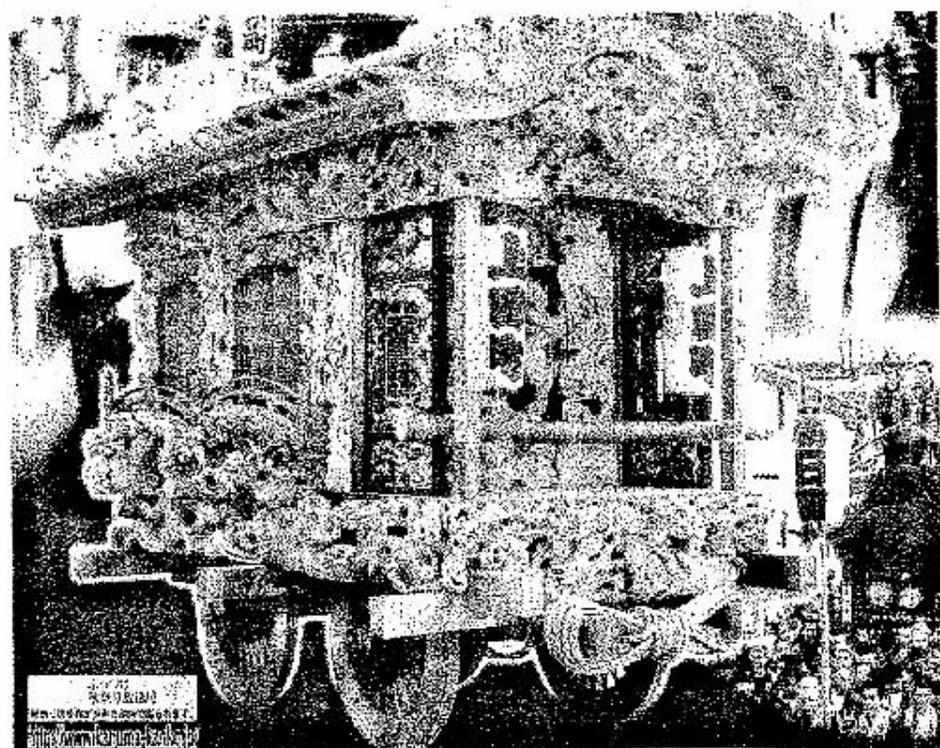
第三五八回史跡めぐり

# 彫刻屋台の街

## 鹿沼と

## 版画美術館を

## 訪ねる



# 彫刻屋台の街

鹿沼と

## 版画美術館を訪ねる

日時 平成十八年九月三十日(土)

集合 越谷駅東口広場 午前八時0分

コース 越谷駅 || 春日部駅 || 新鹿沼駅 || 日光例幣使街道 ||

豊龍寺...木のふるさと伝統工芸館...屋台のまち中央公園(昼食)

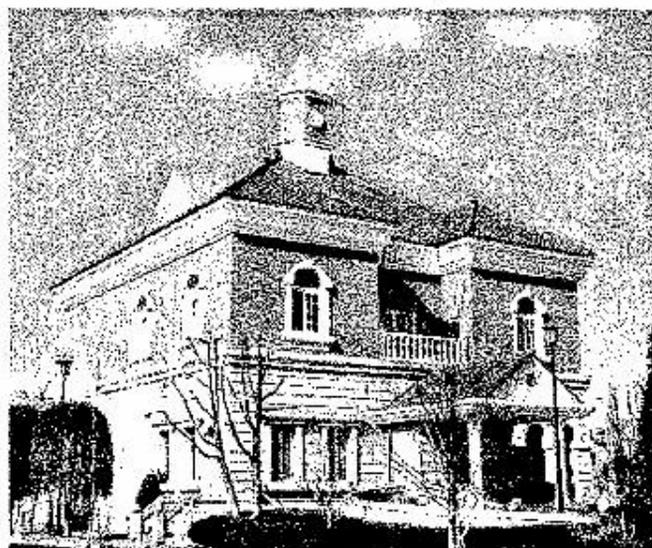
(見学) 屋台展示館・鹿沼の三名園掬翠園...今宮神社...

川上澄生版画美術館・郷土資料展示館...

新鹿沼駅 || 春日部駅 || 越谷駅(午後十七時三〇分予定)

参加費 三、五〇〇円(交通費・入館料・資料代・保険料を含む)

案内者 常任理事 菅波昌夫



版画美術館

## ◆鹿沼市

### ●現代

栃木県西部、宇都宮市の西に接する市。

昭和二三年（一九四八）市制平成一八年四月推計人口一〇四、〇〇〇人。

明治以降、鉄道が通じ製材、木工業が盛んとなり、昭和初期には紡績操業も隆盛を見たが中心は工業となり木材・建具の生産に移った。

農業では米・イチゴ・コンニャク・野菜類、特に関東ローム層中の軽石層の一つである鹿沼土とさつきは本場として有名である。また、近年では電気機器・自動車部品・化学工業の工場が多く設立されている。尚、毎年十月第二土、日には、鹿沼の総鎮守今宮神社の例大祭に繰り出される彫刻屋台は豪華絢爛で、市の象徴である。

### ●近世

江戸時代鹿沼は、江戸と日光を結ぶ交通の要所となり、日光例幣使街道の宿場として発展した。鹿沼氏を抑えた、室町時代の永正元年（一五〇四）戦国大名、初代壬生胤業が壬生城を築城し城下町として栄え、以後二代綱房が御殿山に天文元年（一五三二）鹿沼城を築城し、綱房・綱雄・義雄と四代に渡り、活況を呈したが義雄が秀吉の小田原攻めで北条方に属した為、天正一八年（一五九〇）壬生氏は没落した。

元和二年（一六一六）宇都宮の代官頭、大河内により四・九・六斎市が開かれ市場町として栄えた。寛永十二年（一六三五）阿部重次が一三、〇〇〇石で陣屋を置き、以後内田氏三代が（一六四九年〜一七二四年）までの七五年間陣屋を構えた。その後、五十年間幕府領となり、戸田氏の宇都宮藩領となつてからは、幕末まで支配は変わらなかった。

### ●鹿沼の地名

鎌倉時代（一一八六〜一三九二）日光二荒山神社にある通称「化燈籠」の銘（一二九二）に「鹿沼権三郎人道教阿」とあり此処に歴史上始めて鹿沼氏の名が表れている。

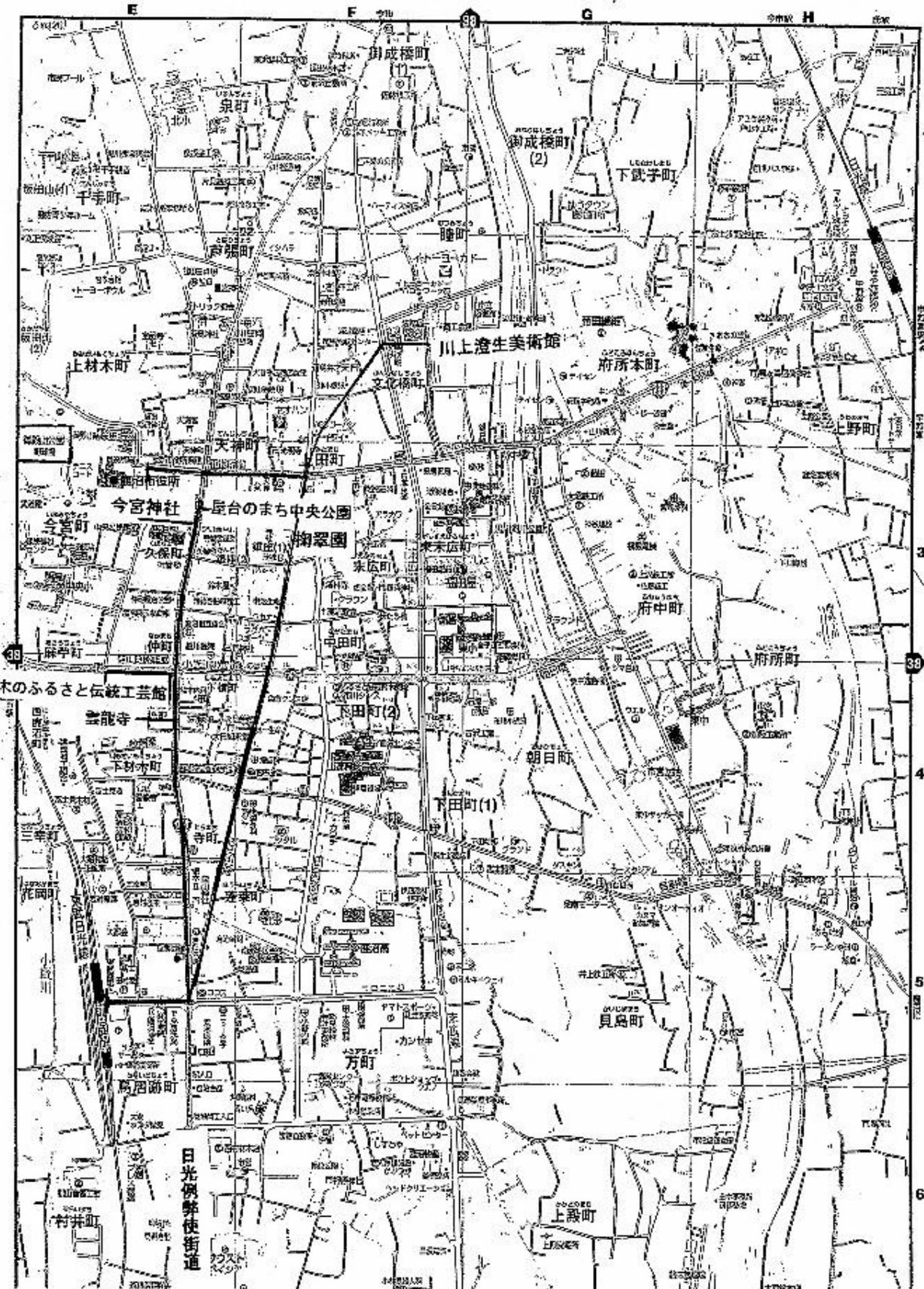
鹿沼市は佐野氏の出身であるとされ鹿沼の地で姓とした。また、日光山の所領として西鹿沼郷の村名が残っている。

- ① レストラン
- ② マジック
- ③ 旅行代理店
- ④ 郵便局
- ⑤ 銀行
- ⑥ 公民館
- ⑦ 公園
- ⑧ 学校
- ⑨ 病院
- ⑩ 神社
- ⑪ 寺
- ⑫ 墓
- ⑬ 公園
- ⑭ 公園
- ⑮ 公園
- ⑯ 公園
- ⑰ 公園
- ⑱ 公園
- ⑲ 公園
- ⑳ 公園
- ㉑ 公園
- ㉒ 公園
- ㉓ 公園
- ㉔ 公園
- ㉕ 公園
- ㉖ 公園
- ㉗ 公園
- ㉘ 公園
- ㉙ 公園
- ㉚ 公園
- ㉛ 公園
- ㉜ 公園
- ㉝ 公園
- ㉞ 公園
- ㉟ 公園
- ㊱ 公園
- ㊲ 公園
- ㊳ 公園
- ㊴ 公園
- ㊵ 公園
- ㊶ 公園
- ㊷ 公園
- ㊸ 公園
- ㊹ 公園
- ㊺ 公園
- ㊻ 公園
- ㊼ 公園
- ㊽ 公園
- ㊾ 公園
- ㊿ 公園

- ① ローン
- ② フォト
- ③ フォト
- ④ フォト
- ⑤ フォト
- ⑥ フォト
- ⑦ フォト
- ⑧ フォト
- ⑨ フォト
- ⑩ フォト
- ⑪ フォト
- ⑫ フォト
- ⑬ フォト
- ⑭ フォト
- ⑮ フォト
- ⑯ フォト
- ⑰ フォト
- ⑱ フォト
- ⑲ フォト
- ⑳ フォト
- ㉑ フォト
- ㉒ フォト
- ㉓ フォト
- ㉔ フォト
- ㉕ フォト
- ㉖ フォト
- ㉗ フォト
- ㉘ フォト
- ㉙ フォト
- ㉚ フォト
- ㉛ フォト
- ㉜ フォト
- ㉝ フォト
- ㉞ フォト
- ㉟ フォト
- ㊱ フォト
- ㊲ フォト
- ㊳ フォト
- ㊴ フォト
- ㊵ フォト
- ㊶ フォト
- ㊷ フォト
- ㊸ フォト
- ㊹ フォト
- ㊺ フォト
- ㊻ フォト
- ㊼ フォト
- ㊽ フォト
- ㊾ フォト
- ㊿ フォト

# 鹿沼中心部

1:10,000



◆日光例幣使街道

●江戸時代、日光東照宮の例大祭（四月）に朝廷より幣帛（神に奉納する物の総称）を奉る為に遣わされた奉幣使を例幣使といい、通行した街道を日光例幣使街道という。

元和三年（一六一七）四月、家康の神霊を久能山から日光に移した以後の正保四年（一六四七）復活し

慶応三年（一八六七）まで続いた。その行程は京都から中山道を通って倉賀野宿に達し此れより例幣使街道に入り、王村・五料・柴・境・木崎・太田・八木・梁田・天明・犬伏・富田・栃木・合戦場・金崎の一四宿を経て、壬生通、榎木宿から日光に達した。帰路は宇都宮から、千住を経て江戸に入り東海道を通って京都に戻った。

◎雲竜寺

天動山往生院と号し浄土宗鎌倉時代初期建久年間（一一九〇～一一九八）平家の落武者が、この地に土着し、法然上人の高弟翁心公上人を迎えて創建されたと伝えられる。

江戸期の寛永・享保・文化年代に三度、明治四十年にも火災に遭い、由緒書、他記録は焼失したが、ご本尊の阿弥陀如来像は火災を免れ、鎌倉の武將、宇都宮頼綱も崇拜した尊像で両脇に観音菩薩・勢至菩薩像をさらに、その両翼に二十五菩薩が整然と並んでおり荘厳で圧巻である。

また、天上の飛天像も美しい。大正四年に本殿が、平成四年に客殿が建立された、現今井ご住職は二九代目で増上寺の布教師でもある。境内には、閻魔堂・六地藏・押原推移記念碑の他、人間国宝「香取正彦」氏制作の梵鐘は素晴らしく墓地には鈴木石橋、山口安良、両先生一族の墓がある。



なお、四月の第二土曜日は花祭り・吞龍上人火祭があり、これは太田市大光院の遺徳にあやかり愛児の成長を祈る行事として大勢の参詣者で賑わう。

◎鈴木石橋、

宝暦四年（文化十二年）（一七五四）一八一五）

本名行徳、号石橋江戸後期の儒学者、安永六年（一七七七）一介の農民が近世の最高学府、昌平校に二四才で入学した最初の人物である。

二八才で帰郷し私塾を開き、蒲生君平を門弟とする鹿沼宿を始め近郊各地の人材を集め、幕末に活躍した人物を多数配出した。

蒲生君平・峰岸休文等尊王論者にも影響を与えた。また、鹿沼の道路・橋の建設等、公共事業を行う。

著作に伊勢記行・下毛国誌・古碑孝・石橋文集等

◎山口安良

天明元年（一七八一）鹿沼仲町に生まれ、諱（生存中の名）を兼永といひ後に安良と

いみな

改めた。家は代々農業と醸造（醤油）を兼ね、資産を有し、父経宏に次いで名主を勤めた。私心なく人を愛し村民の信頼を得、宇都宮領主・戸田忠翰から苗字・帯刀を免ぜられ、また、郷村、取締役を任じられた。公私多忙の間にも私歌を研究し、また、読書に通じ特に鹿沼の旧記をまとめた。「押原推移録」三巻は現代に通じる資料である、なお、壮年時は江戸に学び当時の蜀山人太田南敏（一七四九）一八二三）と狂歌にも通じた。慶応元年（一八六五）病の末八五才没した。



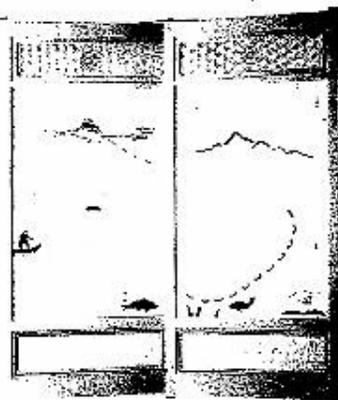
## きびがら細工

「きびがら」の幹を巧みに細み上げ、帯の形を変えた郷土玩具として、そのほのぼのとした表情が愛されています。



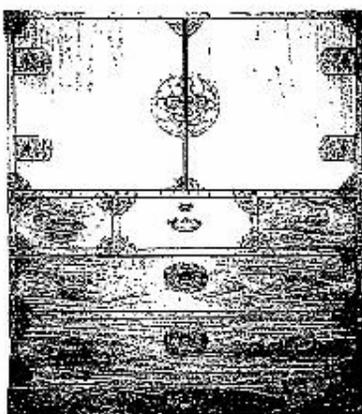
文化年間(1812年頃)に建造されたと考えられ、安政年間(~1860)にかけて制作された扇障子、内欄間、高欄下などの彫物により現在の体裁が整って来ました。彫物は菊彫の名手・神山政五郎(菊政)と伝えられています。

**鹿沼組子書院障子**  
伝統技術と最高級松材を使い、繊細かつ緻密に手作りして組み合わせていく工程はまさに職人技です。



## さつき剪定鋸

白紙(しらがみ)と呼ばれる特殊鋼から仕立てた鋸はさつき剪定用に最適な形状となるよう工夫されています。



## 鹿沼終桐箆

吟味された材料を丹精こめて製品に仕上げた終桐箆は、火に強くまた羽の持つ優美さ、温かさがあります。

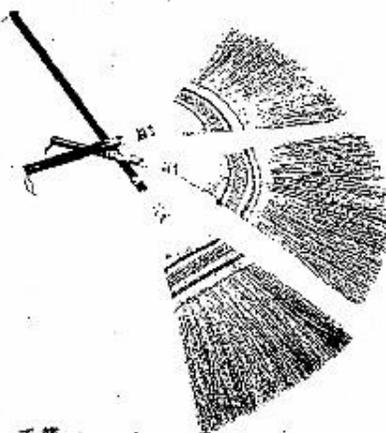


木のふるさと伝統工芸館

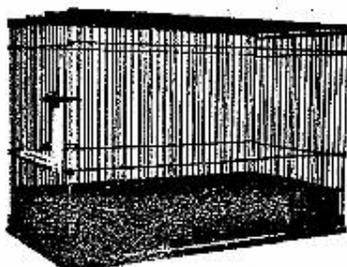
文化年間から安政年間に菊彫の名手・神山政五郎が手掛けたとされる黒漆塗彩色彫刻屋台(石橋町)を取蔵し、鹿沼の伝統工芸品の数々も紹介しています。

## 鹿沼箆

古く天保年間より作り続けられている鹿沼箆は、姿が美しくまた使いやすく丈夫です。特徴は柄と帯の接合部分が鉛型をしています。



**竹製小鳥籠(尺籠)**  
一本一本丁寧に引いたヒゴを使った籠は堅固な上に優美さと温かみを備えています。



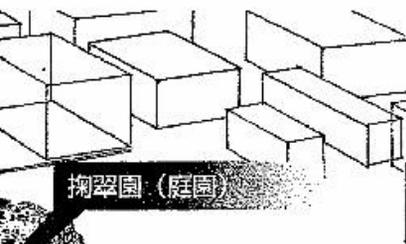
## 下野水車

郷愁を誘い安らぎの情景を再現したミニ水車。

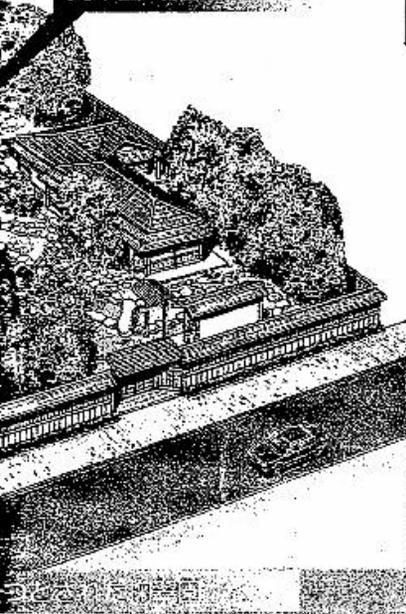


木のふるさと伝統工芸館

ーテインメント。



掬翠園（庭園）



末期から大正初期にかけて造営され、一つと言われた庭園です。川土造文化人がここを訪れたと言われます。展示会や茶道、華道など多目的に利用。「観瀾居」と呼ばれる茶室があり

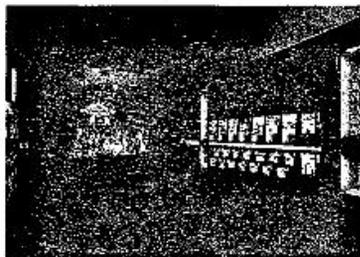


YATAI'S TOWN CENTRAL PARK

YATAI'S TOWN CENTRAL PARK

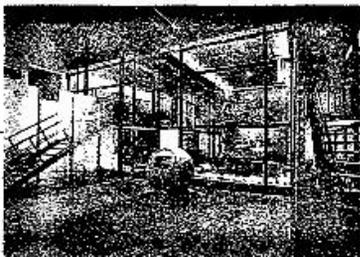
### 鹿沼の屋台

秋祭りに繰り出される華やかな彫刻屋台の数々。「祭り」と「屋台を支える技」を迫力ある9面マルチスクリーンでお楽しみください。



### 屋台展示庫

3台の屋台を独立して収蔵。保存にも配慮しています。各屋台を間近で、いろいろな角度から見ることができます。



### 屋台の歴史

彫刻屋台の起りから現在の屋台への移り変わりを分かりやすく解説。楽しく学べる紙芝居風のミニシアターもあります。



### 彫刻の技術

屋台を彩る彫刻。その材料となる樹木や、彫刻の工程に、直接触れることができます。木のぬくもりが伝わってきます。



# 屋台のまち中央公園

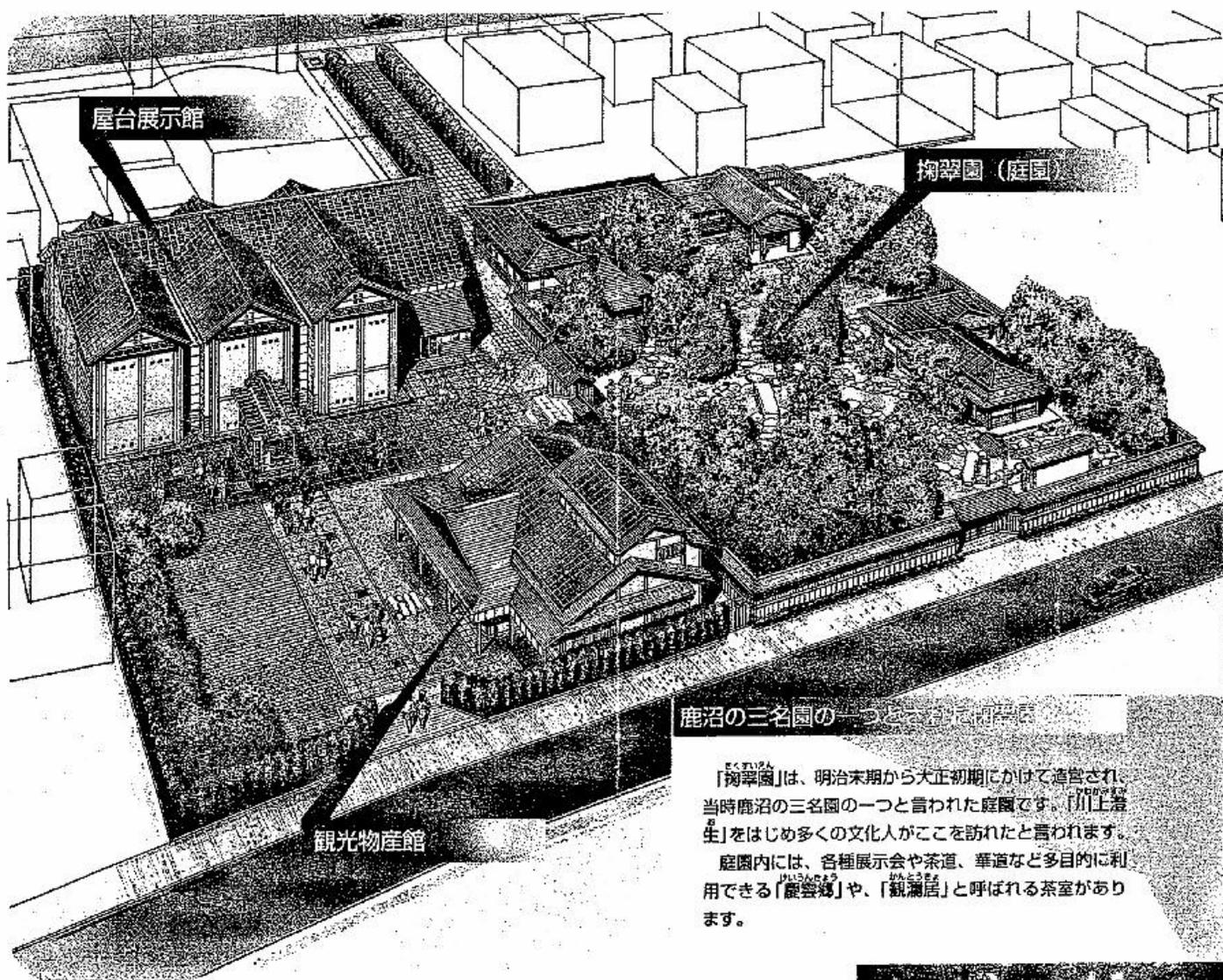
華やか

史は、ターテインメント。

屋台展示館 掬翠園 上野動物園

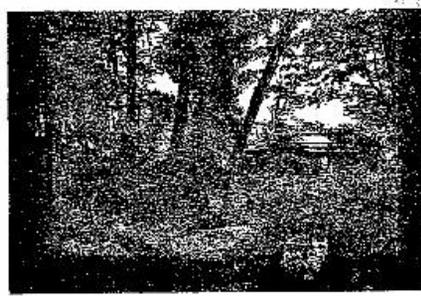


華やかな彩り、彫刻の冴え、歴史はエンターテインメント。



鹿沼の三名園の一つとされる掬翠園

「掬翠園」は、明治末期から大正初期にかけて造営され、当時鹿沼の三名園の一つと言われた庭園です。「川上若生」をはじめ多くの文化人がここを訪れたと言われます。庭園内には、各種展示会や茶道、華道など多目的に利用できる「観雲楼」や、「観瀾居」と呼ばれる茶室があります。



◎今宮神社

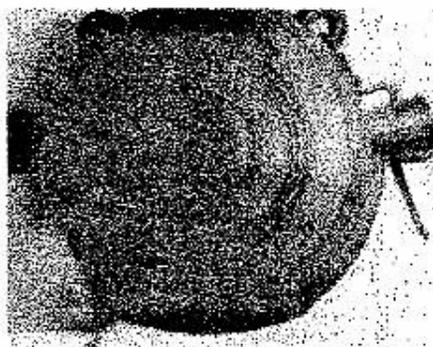
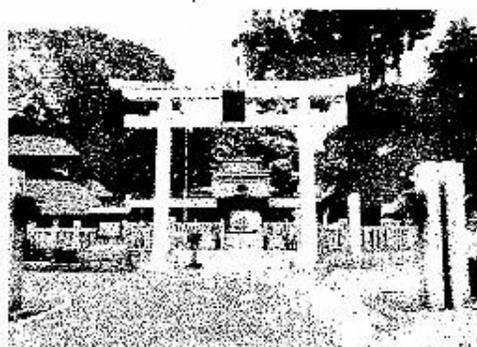
御祭神体 大己貴命オオナムチノミコト(大國主命)・由心姫命タゴリヒメノミコト・味耜高彥根命アジスキタカヒコネノミコトの三柱で少彦名命・スクナヒコノミコトが合祀されている三柱は日光二荒山神社の御祭神と同じである。

天文元年(一五三二)に壬生綱房が現在の御殿山に鹿沼城を築城した折に、勢力圏を日光山にまで影響力を持ち、御所の森の日光三社を、現在の地に移し城の鎮守としたのが今宮神社の始まりである。その後壬生氏が天文十八年(一五九〇)滅亡すると神社も一時荒廃したが慶長十三年(一六〇八)に壬生氏の旧臣らにより社殿が再建され、近世期には鹿沼宿の鎮守「今宮権現」として再び繁栄を向えた。

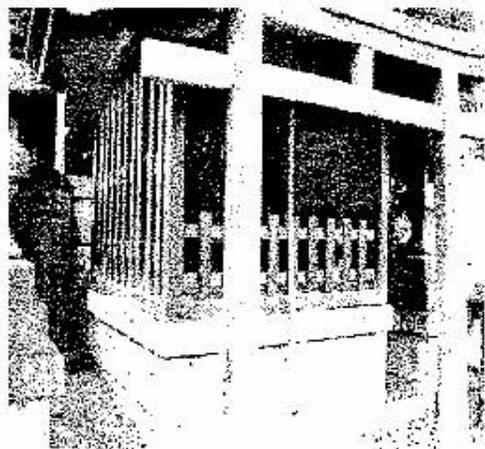
慶安元年(一六四八)徳川將軍から五十石の朱印状を受ける。明治の神仏分離令により今宮神社と改め、後に郷社に次いで昭和六年九月には県社に昇格された。昭和三三年御神門(唐門)及び永祿鰐口が県重要文化財、平成四年二月本殿・幣殿・拝殿が県文化財指定となる。

壬生氏

下野の中世土豪(現栃木県下都賀群壬生町)円仁(七九四〜八六四)を生んだ古代壬生氏の末裔とも、京都官務家、壬生家の庶流とも、平安初期の天台宗の僧、延暦寺第三世座主八六六年寺慈覚大師の諡号を受ける。



永祿鰐口 県重要文化財



(史跡) 鳥居跡

奈良時代に藤原上人が日光山へ、この地に四本のえのきを植えたといわれ、また、鎌倉時代に、藤原氏が日光神宮として遷したとされる神皇六十六代(由緒あるこの地に、日光山の遺蹟を建てたと書かれているように、古い伝承のある地である。後年、鳥居の跡が地名となつて鳥居町になつたと書く。

江戸時代のはじめ、日光への街道が整備され、鳥居町がつくられた際、鳥居町から分岐して作られた新道が現在の大通りであるといふ古記録がある。

その際、鳥居町に置かれた四本のげやきは次第に枯れ、大倉左衛門のあつた鳥居の一本も、鳥居もなくなつておぼしめされた。その跡に、昭和三十二年、日光二重山神社から御神体を遷し、二重山神社を建立した。

鳥居町の名は、由来のある地名「鳥居町」から地名されているが、町内鳥居の歴史となつたのは、昭和四年に東武日光線が開通し、東武日光駅が設置されたことである。

主な参考資料

鹿沼市 鹿沼市史

今宮神社 鹿沼市史

例幣使街道 大日本百科事典

雲龍寺 雲龍寺縁起

木のふるさと伝統工芸館 (パンフレット)

屋台のまち中央公園 (パンフレット)

川上澄生版画美術館 (パンフレット)

鹿沼市経済部商工観光課

# 鹿沼今宮神社祭の屋台行事

縁故祭は毎年7月20日に今宮神社で行われ、屋台行事が始まる。一番町の引渡ぎを行う儀式で新町の一番町が出席し行われる。



縁故祭



五百年の歴史をもつ今宮神社

ぶつつけは例大祭に屋台を出す意志を表す行事で、簡単に造った仮屋台でお囃子を入れ神社に繰り込む。

（新町の最切の上座田）



ぶつつけ

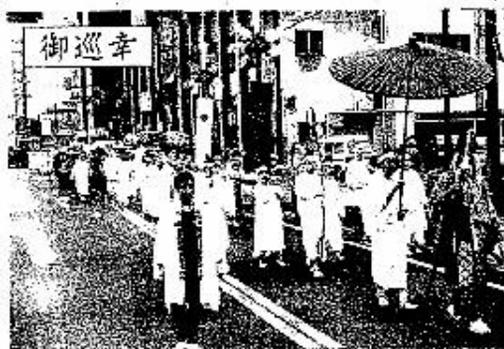
天文元年に壬生綱房が現在の御殿山に城を築いたおりに日光三社を城内に鎮守したのが創建である。今宮祭礼は慶長十三年夏、日照りが続き、氏子たちが今宮に集まり、雨が降ることを三日、一天にわがに曇り、激しい雷雨があり、靈験あらたかくな氏神と敬い、雨のあがった夕べの六月十九日を前宮、二十日を祭礼の日として、鉾・神を曳き、神徳に感謝したのが始まり、後に、付け祭りとして、三踊り舞台などが造られた寛政年間には、いと付け祭りが盛んになり、廻り屋台が造られ、時代背景と町の意気どかにより現在の彫刻屋台と変化を遂げた。



繰り込み 繰り出し



屋台繰り込み一番町を先頭に当番組各町から決められた順番に従って行われる。繰り込みは町内の若衆の屋台引き出し技術とお囃子の技の見せ場で屋台が一番町の台図により為屋をくぐり、本殿に正対して、お囃子を奉納しお返しを受け、境内所定位置につく。夕刻になると、一番町の指示により、お囃子を入れ提灯に灯がともると、いよいよ「屋台繰り出し」が始まる。



10月第二日曜日に執行する神輿渡御ともいう御巡幸は、明治11年に今宮神社の神輿が出来上がると氏子の町々を練り歩くようになった行事で、現在では、当番組の町内のみで行われている。隊列に大榎木（おおさかき）、藤田彦面（さるたひこめん）、斎藤（いわた）こい、獅子頭（ししかしら）など例大祭のおこりに意味するものと共に氏子町の人情が参列し、厳粛に執り行われる。

上組

天神町

上村木町

上里町

御成橋町

泉町

田町下組

阿彌尊像

田町上組

鹿沼の彫刻屋台

彫刻屋台は町内保存として、27台が運行可能な状態で保管されています。保管方法は展示場保管・屋台縦組立保管・屋台縦解体保管など、その町内にあった保管方法がとられています。その内14台は文化・文政・天保年代の江戸時代に製作のもので、13台は明治・大正・昭和・平成に製作されたものです。屋台は時代を反映しており、塗り屋台又は白木屋台と云った所に現れています。構造は、内容と芸場の二室になっており内室には椅子方が乗り込みます。屋台の大きさは幅口一間半、奥行二間半、高さ二間半が標準です。製作において、当時の彫刻師・大工・塗師・金物師の職人の技が結集されていると同時に町民の祭りの心意気が感じ取れます。

下組

仲町

阿彌尊像

府中町

新町

府内本町

上野町

御成橋町

本宮町

石橋町

下村木町

東本庄町

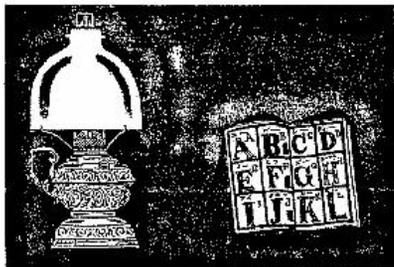
寺町

砂子町

龜塚町

馬場跡町

西暦	年齢	関連事項
1895 (明治28)		4月10日、横浜市紅葉坂に生れる。本名は澄雄。父は横浜貿易新聞主筆川上英一郎、母は小繁。
1915 (大正4)	20	6月5日、母小繁没。
1916 (大正5)	21	3月、南山学院高等科卒業。
1917 (大正6)	22	10月、父のすすめでカナダ・ビクトリアに行く。
1918 (大正7)	23	3月、アメリカのシアトルに渡る。 4月よりアラスカにて造船能製造人夫として働く。 10月、幸徳義興の別荘を現げ帰国。
1921 (大正10)	26	3月、栃木県立宇都宮中学校(現宇都宮高等学校)の英語教師となる。野添淳の助教授を命じられる。
1923 (大正12)	28	宇都宮市御外飯田の舊地に二間の家を新築。 「初夏」と名付ける。
1926 (大正15)	31	画会創作協会に「初夏の風」を出展。
1928 (昭和3)	33	教員免許を取り正式に「教師」となる。
1928 (昭和3)	43	北海道白老村出身の小坂千代と結婚。
1939 (昭和14)	44	2月、長男不爾誕生。
1940 (昭和15)	45	8月20日、父英一郎没。
1942 (昭和17)	47	2月、長女みゆみ誕生。 3月、宇都宮中学校を退職。
1945 (昭和20)	50	北海道の舞の舞台に訪問。4月、次女さやか誕生。 6月、白老村に転居。8月、否小坂中学校を退職になる。
1949 (昭和24)	54	栃木県立宇都宮女子高等学校の講師となる。
1958 (昭和33)	63	3月、宇都宮女子高等学校を退職。
1967 (昭和42)	72	11月16日、勲三等瑞宝章を受ける。
1972 (昭和47)	77	4月、妻千代没。9月1日、心筋梗塞のため急逝。 宇都宮市立川上澄生美術館に眠る。



「洋壺とアルファベット版本」1926年(大正15) 木版多色刷

川上澄生は洋壺のモチーフとして、洋壺をしばしば登場させています。いくつか買ひ求めて手元に置き、好んで使用していました。幼少期の生活に直結する懐かしさがそうさせていたのでしょうか。洋壺の有り方に浮かぶアルファベット版本は、英語の教師であった川上澄生の一面をのぞかせています。

大正から昭和初期にかけての創作版画運動は、多くの版畫芸術家を生み出しました。その中でも詩的な発想を巧みな技術で表現し、異彩を放った川上澄生は、明治28年横浜で生まれ南山学院高等科を卒業後、大正10年宇都宮中学校の英語の教師として赴任しました。英語教師のかたわら木版画の制作を続けていた川上澄生は、アンリ・ルソーを師として初め、自らも日蘭画家に倣し、没後数十年を経過した現在もなお、ファンは増え続けています。

当館は、川上澄生の教え子でありコレクターでもある黒谷川勝三郎氏(現名菅野良)の2000点にも及ぶコレクションの提供により、平成4年9月に開館しました。鹿沼の市街地、黒川のほとりに建つ明治の洋館風の建物は、川上澄生の作風を反映しています。内装は木のまじり鹿沼にふさわしく随所に木が使用され、1階ホール正面には、鹿沼市在住のガラス工芸家である濱田能生氏のステンドグラスが優しい光を運んでいます。

収蔵作品は木版画をはじめ、ガラス絵、漆絵、絹き絵、木工玩具、陶器など多岐に渡り、川上澄生の画業の幅広さを物語っています。これらの作品は、年2回の企画展により紹介され、毎年初夏の風薫るシーズンには川上澄生の代表作「初夏の風」の特別展示を行います。この作品は川上澄生の代表作であり、恋慕の情を自作の詩に託し、絵と詩とを同一画面に融合させた多色刷の美しい木版画で、棟方志功が版画を志すきっかけとなった作品としても有名です。この作品を品あてに訪れる来館者も少なくありません。

時計台のある小さな美術館

鹿沼市立  
川上澄生美術館



KANUMA MUNICIPAL ART MUSEUM  
OF  
KAWAKAMI SUMIO

作品紹介

当館は、鹿沼市出身で川上澄生の教え子でもあった故長谷川勝三郎氏の2,000点にも及ぶコレクション提供により、1992年(平成4)に開館しました。

鹿沼の市街地、黒川のほとりに建つ明治洋館風の建物は、澄生の作品を反映しています。内装は「木のまじり鹿沼」にふさわしく随所に木が使用され、1階ホール正面には、鹿沼市在住のガラス工芸家である濱田能生氏のステンドグラスが優しい光を運んでいます。ここでは様々な小企画展を開催しています。

収蔵作品は木版画をはじめ、ガラス絵、漆絵、焼絵、木工玩具、陶器など多岐にわたり、澄生の画業の幅広さを物語っています。これらの作品は、年2回の展覧会により紹介され、毎年初夏の風薫る時期には代表作「初夏の風」の特別展示を行います。これは絵と詩を同じ画面に融合させた多色刷の美しい木版画で、棟方志功が版画を志すきっかけとなった作品としても有名です。本作を目当てに訪れる来館者も少なくありません。

より多くの来館者に澄生の芸術性を理解し親しんでいただけるよう川上澄生美術館は常に新鮮な企画と情報を提供し続けています。



《初夏の風》1926年(大正15)

この作品は澄生が31歳の時に制作され、第5回画会創作協会展に出品されたものです。淡いメタルグリーンで刷られた美しい風の情が、いたづらに女性のスカートをなびかせます。



《波留み函船D》1969年(昭和44)

澄生が得意とした南盛の作品です。自身が考案出した波留みの構図と色鮮やかな函船が気持ちよさを和ませてくれます。

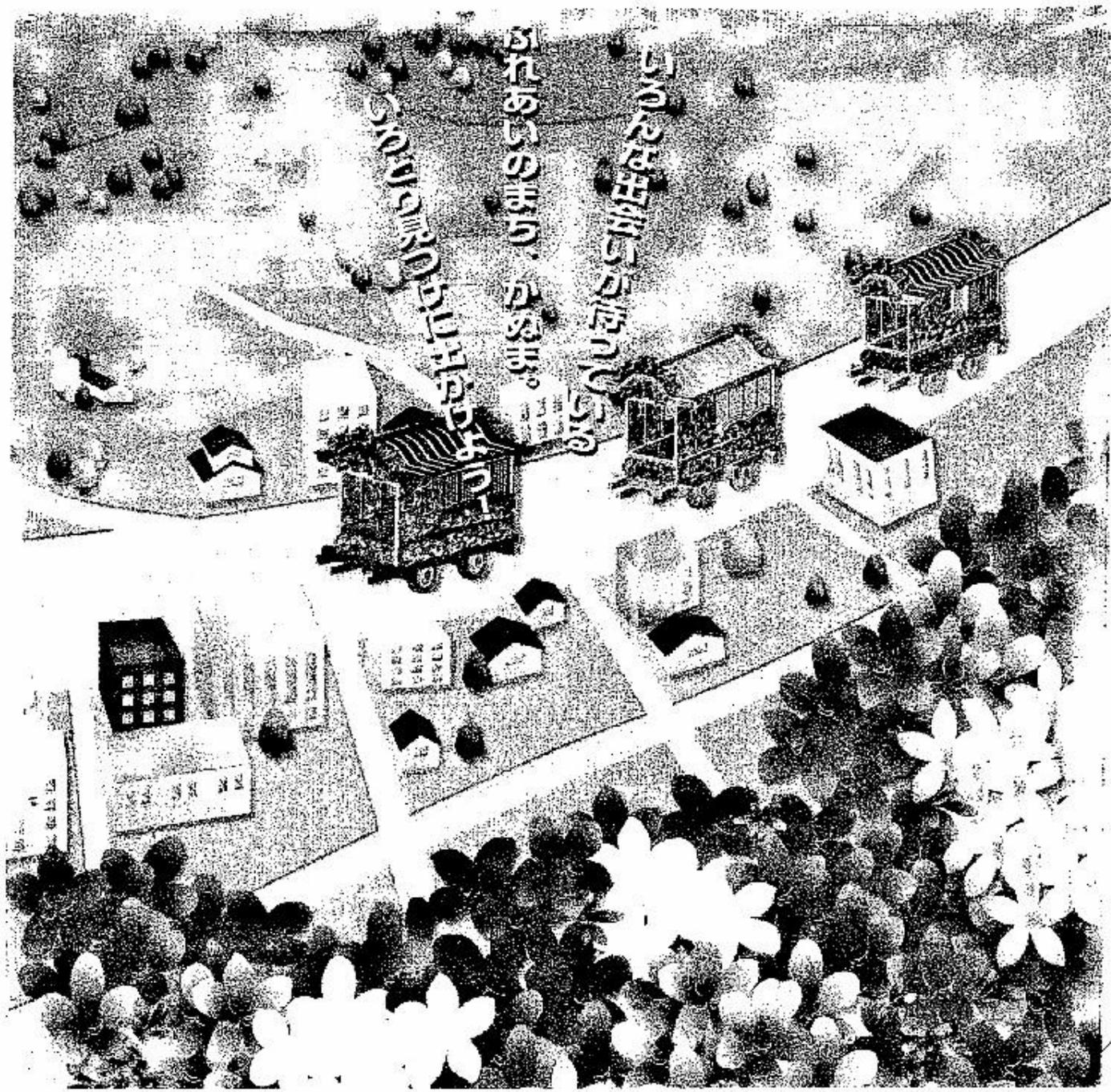


《横浜》1962年(昭和37)

文明開化期の横浜は、澄生の心のふるさとしていた。彼は、和と洋のちくはくな融合をとても愛していました。



「へっほ先生」



SODAKORO BISHADUNO

はれあいのまろかま

ONRERHHSIDENUS

